自転車観光政策後進地域におけるサイクルツーリズムの実装に向けて
—徳島ミニベロアドベンチャーツーリズムサミットの試みー

矢部拓也*・眞鍋祐樹**・萬川奨***

本研究は 2023 年より 3 回実施したミニベロアドベンチャーツーリズムサミットの実践報告である。本ツアーは、マスツーリズムではなく、著者の一人が生業とする自転車産業関係者に限定した少数のフルアテンドツアーである点に特徴がある。自転車産業は台湾が生産の中心であるグローバルネットワークであり、このネットワークとの結合が、今後の台湾からのインバウンド観光計画や、四国遍路特化のオリジナル自転車製造にも結び付いた。従来の地元のホスト側ネットワークに、既存の自転車産業のビジネスコミュニティを観光ツアーとして結合したことで関係人口化し、当初予想しなかった様々なイノベーションを生み出すツアーが産み出されたと考察される。

Keywords：サイクルツーリズム　地方創生　関係人口　ソーシャルキャピタル　観光産業化

1. はじめに

近年、愛媛県今治市と広島県尾道市をつなぐ「しまなみ海道」によるサイクリングは、国内にとどまらず、海外からも多くの観光客を呼び寄せ、サイクルツーリズムの成功事例とされている。そして、このような魅力的なサイクリングルートを国内に張り巡らすべく、ナショナルサイクルルートの指定が進められている。2019 年（令和元年）に第 1 次ナショナルサイクルルートとして、つくば霞ヶ浦りんりんロード、ビワイチ（琵琶湖一周）、しまなみ海道サイクリングロードが指定され、2021 年に第二次ナショナルサイクルルートとしてトカチプ 400（北海道）、太平洋岸自転車道（千葉県銚子市銚子駅から和歌山県和歌山市加太港までの 1,487㎞）、富山湾サイクリングコースが指定された注１）。著者も現在、後述する徳島大学サイクルツーリズム講座などを通じて、次期の指定を目指している、鳥取県の鳥取うみなみロード（とっとり横断サイクリングルート）や、福井県の若狭湾サイクリングルート（わかさいくる）の活動をサポートしている。福井県は、新幹線の敦賀までの延伸に伴い、嶺南地区に人を呼び込む一つの目玉として若狭湾サイクルルートを作ることで、観光事業としての相乗効果を目指している。また、円安の昨今、インバウンド観光客の増大が目立っており、インバウンド観光対策としてサイクルツーリズムを位置づけられることも多く、今後も、サイクルツーリズムへの注目は高まっていくと思われる。

しかしながら、本稿で提示したいのは、地方における地域振興としてのサイクルツーリズムを考える場合、必ずしも、このようなナショナルサイクルルートに指定され、有名になり、多くの観光客が来ることのみが目指すべきものであるのか？という点である。なぜなら、現状のナショナルサイクルルート指定においては、道路整備などのハード面が前景に出てしまい、地域振興の要となるキャッシュポイントなどの「儲かる」観光の視点は後景になってしまっている点がある注 2)。確かに、ナショナルサイクルルートを目指すための道路整備や周辺施設整備などの公共事業による財政出動は、地域に仕事が生まれ経済が動き県内総生産を高める。しかしながら、このような地域振興政策は、1975 年前後に完成されバブル崩壊によって低成長を続けている「日本型工業化社会」の焼き直しに過ぎず、ポスト工業化を迎えた現在の地方社会において有効な手法であるといえるだろうか。サイクルツーリズムなど、一見、ポスト工業化時代の新しい観光政策のように見えるものの、実は、従来の開発国家的な経済発展政策と何ら変わらず、一時的な財政出動による経済効果しか生まず、中長期的な持続可能な発展は望めないのではないだろうか 1)。また、このような政策的な観光政

*徳島大学大学院社会産業理工学部（Tokushima University, Graduate School of Science and Technology for innovation）
責任著者　yabe.takuya@tokushima-u.ac.jp
**眞鍋商会株式会社（Manabe Shokai Co.,Ltd）
***萬川企画（Mankawa Planning）

策の根底にはマスツーリズム的な発想がある。入込数を政策目標とすることが多いために、政策がうまくいった暁には、結果的にオーバーツーリズムを引き起こすという矛盾を有している。宿泊施設や飲食店が少ない地域に多くの人が来ても、対応できる人数を大幅に超えていれば多くの機会損失を生むだけである。地域の持続的な発展を考えた場合、必要なのは、例えば、サイクルツーリズムを通じて、現状の衰退的な地域経済状況から、新たな経済的発展の動き＝新しいビジネスコミュニティが生み出されることではないだろうか。本稿の最後に考察を行うが、現在の流行で言えば、不特定多数の「交流人口」の増大ではなく「関係人口」を生み出す観光事業と言えるのかもしれない。加えて、ナショナルサイクルルート指定されずとも、日本全国に道路は存在しており、理論上「サイクルツーリズム」を実施することはどこでも誰でも可能である。

本研究は、愛媛県などナショナルサイクルルート認定地域に比べると自転車観光政策後進地域である徳島県において、従来のナショナルサイクルルート認定型（しまなみ海道）とは異なった、民間主導のサイクルツーリズムの実践の報告である。

２．徳島大学サイクルツーリズム講座と徳島ミニベロアドベンチャーツーリズムサミット発足の経緯

(1) 徳島大学サイクルツーリズム講座の立ち上げ

徳島県では「自転車王国とくしま」という政策を実施している。しかしながら、観光政策ではなく、健康増進政策として始まっている。そのため、県外客誘致よりは、県民に自転車に乗ってもらい健康になってもらうという方向が強く、担当部署も観光部局ではなく、県民環境部スポーツ・文化局の担当であった。

著者は、2013 年頃より北海道のサイクルツーリズム研究を行っている 2)。研究を通じて、上述のナショナルサイクルルート選定委員の山中英夫氏が同僚であることを知り、その後、サイクルツーリズムの参与観察先の高橋幸博氏も選定委員になったこともあり、2019 年に山中英夫、高橋幸博と 3 人で、徳島大学「人と地域共創センター」の事業として「徳島大学サイクルツーリズム講座」を立ち上げた 3)。当初は徳島大学のフューチャーセンターで対面開催をしていたが、その後、コロナ禍になったために講座は 2020 年からオンラインで開催されることとなった。このことの意図せざる結果として、日本全国の自転車関連のメンバーが参加するセミナーとなった。山中氏は 2016 年に成立した「自転車活用推進法」に研究者としてかかわってきている。そのため。自転車関連の国や地方自治体の各種委員会や自転車利用環境向上会議等を通じて日本国内に様々なネットワークを持っている。また、高橋氏は北海道のインバウンド観光の先進的事業者（令和 3 年度国土交通省自転車活用推進本部自転車活用推進功労者）として評価されており、全国のサイクルツーリズム政策を志す自治体へ講演で呼ばれたり、アドバイザーをしている。そのため、全国（全世界）に自転車関連のネットワークを有している。オンライン開催になることにより、徳島大学で開催される対面のセミナーでは参加できなかった、これらの全国のメンバーが参加することが可能になった。加えて、大学の「観光講座」では毎回様々な「有名人」を呼んできて講演をするスタイルが多いが、徳島大学サイクルツーリズム講座の特徴はメイン講師を高橋氏に固定している点にある。サイクルツーリズムの現場で活動している高橋氏に、毎回、彼の関わっている全国のインバウンド観光を含むサイクルツーリズムの現状の情報提供をしてもらい、実践的にサイクルツーリズムを行っている全国のメンバーと議論し、日本のサイクルツーリズムをきちんと「稼げる」観光産業にすることを目的としている。そのため、上述の鳥取県、福井県などのナショナルサイクルルート指定を目指す地域のメンバーが積極的に講座へ参加する一方で、徳島県内ではこのような動きがないために、徳島の事例報告があまりできない状況であった。著者自身、徳島大学サイクルツーリズム講座として徳島の実践事例をもとに議論したい思いがあり、他地域のアドバイスなどをしているだけではだめだ

なと思っていた時期に、後述するような経緯でミニベロアドベンチャーツーリズムサミットが立ち上がることになった。毎回の成果を主催者の眞鍋祐樹氏に徳島大学サイクルツーリズム講座で報告してもらいながら事業を展開している。

表１　徳島大学サイクルツーリズム講座の過去の開催状況

開催日	内容（当初は対面で実施。コロナ禍の 2020 年はオンライン開催開始。コロナ禍後も対面とオンラインのハイブリット開催。毎回全国からオンライン参加がある）
2019 年 7 月 03 日	サイクルツーリズムの基礎・徳島県内の取り組み紹介
8 月 16 日	サイクルツーリズムを企画しよう
10 月 21 日	徳島のサイクルツーリズムのコンセプトは？
2020 年 3 月 16 日	しまなみ海道における官民連携
2021 年 6 月 25 日	淡路島・徳島連係　大鳴門橋、南淡路、鳴門市
11 月 15 日	つながるサイクルツーリズム　福井・鳥取・しまなみ・八ヶ岳・徳島
2022 年 6 月 10 日	Local to Locals, サイクルキャビン　長崎・岩国
9 月 29 日	ナショナルサイクルルートを目指す鳥取・福井、吉野川市の取り組み
3 月 18 日	インバウンド復活　サイクルツーリズムの各地の取り組み
2023 年 5 月 01 日	若狭湾サイクルリングルート（わかさいくる）の取り組み in 福井敦賀市【出張講座】
7 月 07 日	鳥取サイクルツーリズムのビジョン・課題 in 鳥取県倉吉市【出張講座】
9 月 14 日	大鳴門橋、もてなし環境づくりへ
11 月 17 日	徳島大学サイクルツーリズム講座 in 富山【出張講座】
2024 年 3 月 15 日	サイクルスポーツでつなぐ、とくしまサイクルプロジェクト　吉野川市、小松島市、さなごうち大河原高原ヒルクライム、ローカルチャンピオンシップ構想

(2) 小径自転車専門店の徳島での誕生とミニベロアドベンチャーツーリズムサミット

徳島市内には万代埠頭という元倉庫街のリノベーション地区がある。2021 年にリノベーション倉庫街にミニベロ（小径車）を中心とした「ブルーサイクルラボ」という自転車屋がオープンする。自転車屋をオープンさせた眞鍋祐樹氏は吉野川市山川町出身である。吉野川市山川町は徳島市から約 30 キロ離れた高越山のふもとにあり、眞鍋氏の曽祖父・祖父がその地に眞鍋自転車店を経営していた。眞鍋氏は大学卒業後、香川県の地方銀行に就職し、すぐには自転車屋を継いではいない。彼が銀行時代に香川県配属であったことから、香川県さぬき市の国内の小径自転車メーカーの Tyrell 注 3）を知ることとなる。退職後に一旦は徳島県庁に就職するも、その後に、高松市の Tyrell を中心に扱う自転車販売店で修行をおこなう。その時に技術を教えてくれたのが Tyrell の渋谷氏であり、Tyrell の協力を得てミニベロ（小径車）や折りたたみ自転車特有の知識や技術を身につけた。そのような縁もあり、メイドインさぬきを標榜する国内メーカーTyrell のミニベロを中心とする自転車店を徳島でオープンした。その後、同じミニベロメーカーということで Tyrell とも親しい Pacific Cycles とも縁ができた。Pacific Cycles Japan では毎年、ディーラーズミーティングという、自転車販売店と一緒に自転車旅行を行いながらメーカーと販売店の交流を深める事業を行っている。このディーラーズミーティングの候補地となるとサイクリングのメッカでもある沖縄や北海道になることが多いが、Pacific Cycles Japan の大川氏と親しくなり、この候補地として徳島はどうだろうかという話になった。そ

こで、ミニベロと自転車関係者に特化した徳島でのサイクリングツアーの提案として始まったのがミニベロアドベンチャーツーリズムサミットである。

3. ミニベロアドベンチャーツーリズムサミットの分析

上述の知名度の高いナショナルサイクルルートのようなマスツーリズムではない、多くの観光客を呼び込むこともない、ミニベロアドベンチャーツーリズムサミットの「観光」としての意義は何なのであろうか？

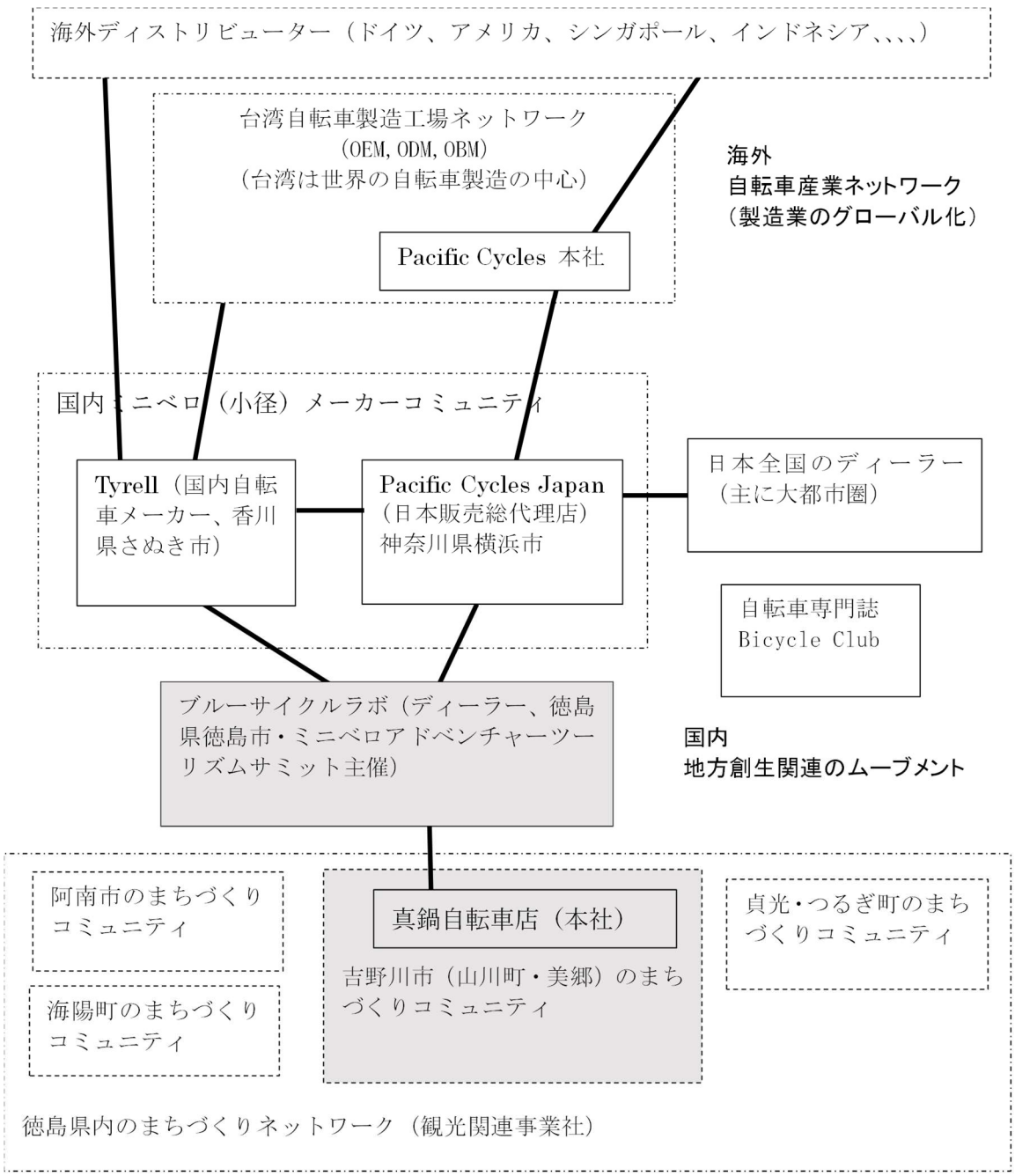

図-1　ミニベロアドベンチャーツーリズムサミット前の組織間のネットワーク構造
（理念型）

図１はミニベロアドベンチャーツーリズムサミット開催前の関連する組織間のネットワーク構造を図示したものである

ミニベロアドベンチャーツーリズムサミットを主催することとなる「ブルーサイクルラボ」(中央塗りつぶし）は自転車の販売を通じて「国内ミニベロ（小径）メーカーコミュニティ」とつながりがあり、その中の有力な企業として「Tyrell」と「Pacific Cycles Japan」が存在している。また、国内自転車メーカーの Tyrell であっても、全ての部品を自社で製造しているわけではない。ODM（Original Design Manufacturing）により台湾の工場に委託しフレームなどを製造しており、台湾の自転車製造メーカーとのつながりが深い。加えて、Tyrell は海外にも輸出しており、海外ディストリビューターとの関りもある。Pacific Cycles Japan の本社は台湾であり OBM（Original Brand Manufacturing)、自社ブランドの製品を自社で生産している。自転車産業はグローバル化しており、ミニベロ（小径）メーカーコミュニティを介して、徳島県にあるブルーサイクルラボは、間接的に海外とつながっていた。加えて、グローバル企業である Pacific Cycles Japan は国内各地にディーラーをもっており、前述のように、このディーラー向けの観光ツアー（ディーラーズミーティング）を徳島で開催するためのモニターツアーとして始まったのがミニベロアドベンチャーツーリズムサミットである。ミニベロアドベンチャーツーリズムサミットの特徴は、自転車販売を通じて関係性が生まれた、この「国内ミニベロ（小径）メーカーコミュニティ」を核として、そこにつながっている関係者をゲストとする点に特徴がある。結論の先取りになるが、現状の 3 回は国内メンバーがゲストであるが、今後はこのネットワークに連なる海外メンバーもゲスト対象になっており、2024 年夏には台湾メンバーを対象にツアーを計画中である。

一方、ホスト側の国内、徳島県内のネットワークはどのように形成されたのであろうか。主催者である、ブルーサイクルラボ代表の眞鍋氏は、銀行退職後 U ターンし地元でのまちづくり活動を始めている 4)。祖父の自転車店がある地元吉野川市山川町とその周辺地区である美郷を中心とするまちづくコミュニティとは深いつながりがある。加えて、自転車屋を事業継承する前に徳島県庁で地方創生関連の部署にいたこともあり、徳島県内の様々なまちづくりコミュニティのメンバーと面識があった。ホスト側は地方創生のムーブメントに関連のあるネットワークである。

これまで 3 回実施されているミニベロアドベンチャーツーリズムサミットへの関連団体を整理すると以下のようになる。本稿の最後において、「関係人口」の視点から議論しようと考えているので、「代表者の出身地と企業の関係」という項目を入れている。

表-1　自転車関連事業社

団体名	職種	事業所住所	代表者の出身地と企業の関係	役割	ミニベロアドベンチャーツーリズムへの参加回とかかわり方の変化
ブルーサイクルラボ	ディーラー	徳島県徳島市、吉野川市	大学卒業後県外就職し U ターン後、事業承継	ホスト	主催者
Tyrell（有限会社アイヴエモー	国内小径自転車メーカ	香川県さぬき市	大学卒業後県外就職しUターン	ゲスト	全て参加。第 3 回では出張シェフの代わりに

ション)	ー		後、地元香川で自転車メーカーを起業		自らBBQ一式を持参し、初日の夕食を用意
Pacific Cycles Japan	台湾の老舗自転車メーカーの日本支社	神奈川県横浜市	徳島県外出身で、これまで徳島県とは特に関係なし	ゲスト	全て参加。第3回ではPacific Cycles Japanのプロモーション動画を撮影し公開

表-2　徳島県内の受け入れ側メンバー一覧

関連団体名	職種	事業所住所	代表者の出身地と事業の関係	役割	ミニベロアドベンチャーツーリズムサミットへの参加回とかかわり方
コリバティ・地域商社「あわい商店」	宿泊、地域商社	阿南市・徳島市	県外から移住して起業	ゲスト	第1回目のみゲスト参加。第2回目は出張シェフの食材を地域商社を通じて提供
吉野川市地域おこし協力隊メンバー	地域おこし協力隊	吉野川市	県外出身者やUターン	ホスト	第1回目のみ(2,3回目は日程が合わず＆自転車との親和性が低い)
To GoKitchen	出張シェフ	吉野川市鴨島町	徳島県内出身でUターンして地元ではない吉野川市で起業	ホスト	第1,2回目（3回目は日程が合わず）
Trip 四国川の案内人	アウトドアガイド	貞光町	県外から移住して起業（パートナーは地元出身でUターン）	ホスト	第1,2回目（3回目は日程が合わず）
轟竜瀑院竜王寺住職	僧侶、釣りセミプロ、サイクリスト	海陽町	徳島出身で家業を継ぐ	ホスト	第2,3回目（サイクリングガイドと釣りガイド担当、第3回では地元海陽町ツアーのプロデュース、自転車ご祈祷を実施）
大畠酒造	梅酒醸造	吉野川市美郷（梅酒特区）	地元出身で梅栽培から梅酒醸造業（梅酒特区）を起業	ホスト	全て参加。吉野川市美郷の定番の訪問地。絶景の場所で梅酒試飲、サイクルで飲めない場

					合は、夕食時に提供
オフィス萬川	ゲストハウス管理、映像クリエーター	吉野川市鴨島町	県外からの移住。地域おこし協力隊として美郷のほたる館で勤務後、ゲストハウス＆映像クリエーターとして吉野川市で起業	ホスト	全て参加。吉野川市の宿泊場所。サミットの動画撮影をすべて担当（普段の活動も撮影）。

それでは、表 1,2 を参照しながら、現在まで３回行っているミニベロアドベンチャーツーリズムサミットの分析を行ってゆこう。

(1)ガイド付きサイクリングツアーアクティビティ調査（2022 年）

実は、第 1 回ミニベロアドベンチャーツーリズムサミットの開催までに、眞鍋氏と著者も含む吉野川市山川町のまちづくりコミュニティが中心になり「ガイド付きサイクリングツアーアクティビティ」をテーマに何回かのツアー開発を行っている 5)。コンセプトとしては、①アドベンチャーツーリズム：自転車以外のアウトドア要素との連携（キャニオニング、カヤック）、②コンセプトガイド：顧客に合わせたガイドをリスト化及び発掘（例えば、カメラマンをターゲットにしたロケーションツアー、Tyrell ミニベロファンのツアー等）、③ミニベロ、E-BIKE、サポートカー帯同：地形やニーズに合わせた自転車の選択、走りの楽しみやストーリー性を感じる場所や人数、サイクリングツアーに合わせたサポートカーのラインナップ、④現実離れした食事（ストーリー性のあるもの）：地元の食材やガイドでないと仕入れられないものを飲食店ではない場所で地域性を感じながら食事をするという 4 つのテーマを掲げた。具体的には、地元である吉野川市の山川町と美郷地区を中心に、「Trip 四国川の案内人」と連携してリバーカヤック、サイクリング、キャニオニング、シェフ in BBQ を組み合わせたツアー開発（2022 年 7 月 25 日）、吉野川市山川・美郷のＥバイクサイクリング調査（2022 年 8 月 22 日）、四国の最東端蒲生田岬（阿南市）サイクリング（2022 年 9 月 26 日）などを実施した。「表-2　徳島県内の受け入れ側メンバー一覧」に示されているメンバーはこのツアー開発を通じて関係性を形成し深めてきた。

但しこの段階では、ミニベロアドベンチャーツーリズムサミットのような明確な顧客のターゲットがあったわけではない。図１の下側の「国内　地方創生関連のムーブメント」と記したネットワーキングは出来上がり、ホスト側の潜在的なソーシャルキャピタルは出来上がっていたが、明確な顧客ターゲット層は存在しなかったために、コース開発にとどまり、継続的なツアーが産み出されることはなかった。ある意味、冒頭にあげたナショナルサイクルルート指定型のマスツーリズム同様で、地元を盛り上げたいという気持ちはあるが、受け入れ側の論理しかなかった。この状況が変化するのは、もともと主催者の自転車屋であるブルーサイクルラボとビジネス上のつながりがあった、図１の上側のゲスト側が所属する自転車関連のネットワークと、下側のホスト側のネットワークが「ミニベロアドベンチャーツーリズムサミット」というコンセプトで結合されたことによる。

(2)第１回ミニベロアドベンチャーツーリズムサミット（2023 年 6 月 3 日ー4 日）

ミニベロアドベンチャーツーリズムサミットのコンセプトの誕生

前述のように、Pacific Cycles Japan の大川氏より、ディーラーズミーティングの候補として徳島を提案されたことを受けて行った（モニター）ツアーが「第１回ミニベロアドベンチャーツーリズムサミット」である。「ミニベロアドベンチャーツーリズムサミット」のコンセプトは主催者の眞鍋氏の言葉を借りると、「自転車業界関係者のみを誘致してフォールディングバイク（折り畳み自転車）やミニベロ（小径自転車）の使い方を共有し、他のアクティビティと組み合わせて、新しいライフスタイルを創造したり、それぞれの文化を共有する空間を演出して新たな価値を創造したり、考えたりする時間のこと。自転車・パーツ・アパレル・雑誌・アウトドア用品・カヤック等の各メーカー業界関係者の開発中の商品・新商品のスペックテストを兼ねることも可能」となる 6)

2022 年まで段階では「(自転車以外の) 他のアクティビティと組み合わせて新しいライフスタイルを創造」するという徳島の受け入れ側の論理しかなかったものが、今回「自転車業界関係者」という明確なゲスト像ができることで、「メーカー業界関係者の開発中の商品・新商品のスペックテストを兼ねる」という新しいツアー参加の意義が加わり、ミニベロ（小径自転車）メーカー首脳陣が集まるツアーという「サミット」という名称（新コンセプト）が加わった。

ツアー行程

第 1 回のコンセプトは「吉野川カヤック×剣山」ツアーである。これは、これまで「Trip 四国川の案内人」と連携して開発してきた、リバーカヤック、サイクリング、キャニオニング、シェフ in BBQ の実証であった。しかしながら、ツアー当日は大雨で吉野川が増水し、本プランは実行することができず、予定変更（B プラン）となった。

表-3　第 1 回ミニベロアドベンチャーツーリズムサミット行程（2023 年 6 月 3-4 日）

日程	行程（天候不良で急遽、スケジュール変更した B プラン）	ツアー動画
Day1	吉野川市鴨島町 : 吉野川土手サイクリング→江川の遊水地でのキャンプ飯（パエリア＆コーヒー） 吉野川市美郷 : 大畠酒造（梅酒特区）で梅酒、天空のレストラン（アウトドアダイニング）	
Day2	吉野川市鴨島町 ; Hostel OE で早朝ミニベロサミット 美馬市脇町 : 重要伝統的建造物群保存地区「うだつの町並み」散策、つるぎ町 : 剣山途中の池でカヤック、キャンプ飯→剣山ダウンヒル	

Day 1 は吉野川増水につきカヤックは中止となり、定番の日本最大の中洲である善入寺島（吉野川市）のサイクリングもできなかったが、これまで開発してきた吉野川土手のサイクリングと江川の遊水地でのキャンプ飯（吉野川市）は実施した。また、吉野川市美郷の大畠酒造（梅酒特区）での梅酒、天空のレストランでの出張シェフによるアウトドアダイニングは実施できた。天空のレストランの会場は地元和紙会館の和紙を利用した提灯やテーブルクロス、アート作品の装飾、当日のサーブは吉野川市の地域おこし協力隊がサポートした（図-2)。

図-2　増水で通行止めの善入寺島にかかる潜水橋（一番左）と天空のレストラン（中央・右）

図-3　剣山の池でのカヌーとキャンプ飯

Day2 は宿泊している萬川氏が運営するゲストハウス Hostel OE で、昨日の振り返り（サミット）を実施した。剣山までは車移動で時間がかかるので、吉野川市の隣の美馬市脇町のうだつの町並み（重要伝統的建造物保存地区）の散策を行い、剣山の麓の貞光町にある本ツアーのメインガイドである Trip 四国の案内人のオフィスを訪ねた後に、剣山に向かった。吉野川のカヌーができなかったので、剣山山頂途中にある池で簡易的なカヌー体験を行い、キャンプ飯を食した後に、剣山ダウンヒルを実施した。悪天後なので、山道は危険でないかと思われるが、雨天後危険なのはむしろ山道ではなく、増水した川である。ガイドの牛尾さん曰く、剣山の道路はライフラインであるため、悪天後もすぐに道路整備がなさ、よほどのことがない限り通行不能にならないそうである。加えて、今回の Day２の参加者は、Tyrell プロダクトマネージャーの渋谷氏、Pacific Cycles Japan の大川氏であり、ふたりとも自分たちが設計・製造した自転車を持参しての参加である。自らが乗る自転車の性能は熟知したうえでのテストライドを兼ねている。テストライドであるので、限界をテストできる、（若干の）悪条件の方が適切であるという、一般客ではなく、自転車関係者に特化しているがゆえに可能なツアー内容となった（図-3）。

ソーシャルキャピタルとしての参加メンバー選定とその後の展開

Day1 の参加者には阿南市と徳島市で宿泊施設を経営し、地域商社も経営している「コリバティ・地域商社「あわい商店」」を経営している小柳氏を招聘している（表-2）。2020 年に実施した「ガイド付きサイクリングツアーアクティビティ調査」のメンバーでもある。これまでのツアー開発を一緒に行ってきたメンバーにゲスト側で参加してもらい、ミニベロアドベンチャーツーリズムサミットのコンセプトを理解してもらい、場合によっては今後のツアーの受け入れとなる可能性を探っての招聘であった。現在のところ阿南市でのツアー実施の見通しはないが、小柳氏は地域商社も運営しており、後述する第 2 回ミニベロアドベンチャーツーリズムサミットでは出張シェフが調理する地元の海産物の提供を担当してくれた。

また、地域おこし協力隊には今後の観光事業の担い手との期待から参加をお願いした。しかしながら、本

ツアーが自転車特化型のツアーとなってしまったことから、地域おこし協力隊の特性とはマッチせず、結果的に第1回目だけの参加にとどまり新たな展開は生まれなかった。

(2) 第2回ミニベロアドベンチャーツーリズムサミット（2023年8月14日－16日）

第2回ミニベロアドベンチャーツーリズムサミットのテーマは「阿波踊り×釣り」とした。2023年はコロナ明けで、日本全国で「祭り」が再開された年であった。徳島市でも8月12-15日の4日間、例年通りに大々的に阿波踊りが復活した年である。但し、阿波踊りは8月12-15日に徳島市だけで開催されているイベントではない。実は、徳島市の阿波踊りの前後の日程で、周辺市町村でも開催されている。しかし、「有名連」といわれる技量の高い連は、規模の大きい徳島市の阿波踊りを中心に考え、近年は周辺市町村の阿波踊りには参加しない傾向にある。そのため8月12-15日の徳島市の阿波踊り以外は寂しい状況になっていた。我々が活動のメインとする吉野川市も同様で、これまで数日にわたって阿波踊りを運営しても観客もまばらなことから、「一夜限りの阿波踊り」と銘打って、2023年8月16日（徳島市の阿波踊りの最終日は8月15日であり、その翌日）に1日だけ復活させることとなった。

偶然ではあるが、吉野川市の「一夜限りの阿波踊り」の実行委員長とも我々は懇意であり注 4)、加えて、アドベンチャーツーリズムサミット主催者の眞鍋氏が「有名連」と懇意ということもあり、「有名連」と一緒にアドベンチャーツーリズムサミット参加者も阿波踊りを踊り、地元開催の阿波踊りを盛り上げることとした。

第2回目で大きく変わったのは、自転車専門雑誌「Bicycle Club」の2023年11月号の「自転車×釣り：自転車乗りは釣りも大好き」という特集の候補の一つとして今回のツアーが選ばれ、特集担当者が参加したことである注5)。紙幅の都合上、詳細は省くが、本特集担当者と既知であった眞鍋氏は大の釣り好きであり、また、メンバーには釣りのセミプロもおり、加えて、元々の自転車関連のメンバーも釣り好きであったので、今回のテーマの一つが「釣り」となった。

但し、今回も台風による天候不良に見舞われ、プランは大幅に変更になった。当初は見物に行こうと思っていた徳島市の阿波踊り最終日の15日は大雨で中止、幸い、翌日16日が奇跡的に天気となり、吉野川市鴨島での一夜限りの阿波踊りが開催できたのがせめてもの救いであった。

表-4　第2回ミニベロアドベンチャーツーリズムサミット日程（2023年8月14-16日）

日程	行程（天候不良で急遽、スケジュール変更したBプラン）	ツアー動画
Day 1	徳島市内サイクリング→雨天につき大型店内での阿波踊り見学→海女料理ししくい（徳島市）→ひょうたん島クルーズ（徳島市）→Hostel OE(吉野川市鴨島町)	
Day 2	（雨天で徳島市の阿波踊り中止）阿波和紙伝統産業会館での和紙漉き体験（吉野川市山川町）→屋内釣り堀で釣り体験（徳島市）→お遍路八十八か所の一番札所霊山寺（鳴門市）→出張シェフ	
Day 3	吉野川市でショートサイクリング＆アウトドアブレックファースト→11番札所藤井寺（吉野川市）→日本最大の中洲・善入寺島サイクリング→Hostel OE屋上でのテントサウナ→一夜限りの阿波踊り（吉野川市鴨島町）	

Day1は、昼過ぎにPacific Cycles Japanの大川氏が徳島駅に到着した際は時は晴れていたので、急いで徳島市内の阿波踊りの桟敷席（阿波踊りは夕方からなので、昼間は自転車でも通れる）をサイクリングしたがすぐに雨になる。そのため、室内で阿波踊りを行っている大型店（イオン）に行き阿波踊り見学。その後、徳島市内で海女料理が食べられる店（釣りができないので、せめて海鮮の食事にした）に行き早めの晩御飯。一瞬雨が止んだので、水都徳島を代表する、「ひょうたん島クルーズ」というNPO法人新町川を守る会が運営する、徳島市内の川の船による周遊を行うも、途中で雨に降られる注6)。その後、定宿の吉野川市鴨島町のHostel OEに移動。

Day2は、徳島市の阿波踊り最終日であるので、当初は、夜の徳島市内の阿波踊りの見学予定であった。当日の阿波踊り開催の判断が下されるのが夕方であるので、午前中は吉野川市の阿波和紙伝統産業会館で和紙漉き体験を行い、徳島市内に向かって移動。午後に室内の釣り堀で釣り体験をしているタイミングで阿波踊りの中止が決定された。帰路は回り道をして、お遍路八十八か所の一番札所である霊山寺に寄ってから、Hostel OEに戻り出張シェフ。本来は自分たちが釣った魚を料理してもらう予定であったが、天候不良で釣りはできなかったこともあり、第1回サミット参加者の阿南の地域商社「あわい商店」に海産物の提供を依頼し、シーフード料理をいただく（図-4）。

図-4　吉野川市鴨島町HostelOEでの出張シェフ（左）と屋上でのテントサウナ（右）

Day３は奇跡的に天候が回復したので、一気に予定を詰め込むこととなる。吉野川市で最近オープンした「ちえの森」というキャンプ場までショートサイクリングとアウトドアブレックファースト。その後、前回雨天で実施できなかった、定番のサイクリングコースである日本最大の中洲・善入寺島のサイクリング（図-5）。戻ってきて、Hostel OEの屋上でテントサウナ体験（図-4）。夕方になり、一夜限りの阿波踊りは奇跡的に開催され、有名連の先頭で、birdy(Pacific Cyclesの自転車ブランド名),Tyrell、Blue Cycle Laboの名の入った提灯を先頭に、有名連と一緒に阿波踊りを行った（図-6）。

図-5　アウトドアブレックファースト後の記念写真（左）、本最大の中洲・善入寺島（中央）と潜水橋（右）

図-6　一夜限りの阿波踊り　有名連の先頭で踊るメンバー（左・中央）と有名連の女踊り（右）

ソーシャルキャピタルとしての参加メンバー選定、参加アクティビティとその後の展開

今回の自転車専門雑誌「Bicycle Club」というメディアの受け入れと映像撮影がうまくいったことで、第3回目は公式YouTubeチャンネルをもっているPacific Cycles Japanの撮影班の受け入れがメインテーマとなる。発足目的のディーラーズミーティングの誘致よりも、先に本業の動画撮影が行われ点がアドベンチャーツーリズムサミットの特徴であると言えよう。単なるレジャーではなく、ビジネスコミュニティとして本業に寄与するツアーである為に、参加メンバーの需要に応じてツアー内容が柔軟に変化してゆく。このメンバーのフィードバックに基づき、内発的に柔軟にツアー内容を変化させ、参加する価値を高めてゆくダイナミズムこそが、不特定多数のマスツーリズムではなく、興味関心を共有する少数の限定されたメンバーのみで繰り返しツアーを行う最大の意義であると言えよう。加えて、第2回「自転車×釣り」というテーマが不完全燃焼で終わったために、このテーマは第3回に引き継がれることになる。雑誌取材のためにツアー翌日、豪雨の中、取材対象地の下見を行い、後日、天候回復後、阿南、海陽町の港に行き釣りを実施し掲載に至る（図-7）。この際中心的な役回りをしたのが、サイクリストであり、釣りはセミプロである、轟竜瀑院竜王寺の住職であり、第三回目ツアーが彼の地元である海陽町開催へとつながってゆく。

図-7　自転車専門雑誌「Bicycle Club」2023年11月号「自転車×釣り」特集(64-67頁)

加えて、意図せざる帰結として、小雨の中、ひょうたん島クルーズに乗ったことにより、第3回目のミニベロアドベンチャーツーリズムサミットの前日の試乗会で実施したTyrellとPacific Cycles Japanのbirdyによる船輪行につながる。通常の定時の周遊航路ではなく、「ひょうたん島水上タクシー」という連絡すれば、決まった船着き場にオンデマンドで来てくれるサービスが新しく始まっている。今回は自転車を載せずに人

だけが乗ったが、第 3 回前日の試走会では、折り畳みミニベロという特徴を活かし、自転車を折り畳み、船に乗せて移動するという輪行を行った。行きは橋を渡り、小松海岸に行きミニキャンプを行い、帰りはひょうたん島水上タクシーを呼び、自転車を載せて最短で戻ってくるというミニアクティビティは、現在、遠方から徳島に来た方への歓迎と徳島型のライフスタイルを体験できる定番のミニツアーとなっている。

(3) 第 3 回ミニベロアドベンチャーツーリズムサミット（2024 年 4 月 6-9 日（6,7 日試乗会））

第 3 回ミニベロアドベンチャーツーリズムサミットは Pacific Cycles Japan の YouTube での広報番組撮影をメインとして行程を企画した。また、今回は、これまでと異なり、前半の土日（6, 7 日）を Tyrell と birdy(Pacific Cycles の自転車ブランド)ユーザーとの試乗会≒「仕事」とし、後半の 8,9 日を通常のミニベロアドベンチャーツーリズムサミットとしてツアー実施した点にある。

今回のコンセプトは、サイクリストで釣りのセミプロである轟竜瀑院竜王寺の住職プロデュースの故郷の海陽町を訪ねるツアーである。本来であれば、ミニベロを駆使して町中の水路を回りながらの釣りを企画していたが、今回も雨のため当初計画したような釣りはできず、B プランの実行となった。

表-5　第 3 回ミニベロアドベンチャーツーリズムサミット行程（2024 年 4 月 6-9 日（6,7 日試乗会））

日程	行程
試乗会	早朝ブルーサイクルラボ（徳島市）集合→小松海岸までモーニングライド、チェアリング＆キャンプ（コーヒ＆ホットサンド）→帰りはひょうたん島タクシーを利用して、ミニベロ折り畳み体験をして船輪行
Day 1 海陽町	今回も雨のため B プラン。朝五時に徳島市を出発して、轟竜瀑院竜王寺（海陽町）にて自転車ご祈祷→漁港で海鮮丼→大里松原海岸で撮影→オートキャンプ場まぜのおか（宿泊場所）→釣り→伊勢海老お造りワークショップ、Tyrell 代表の廣瀬氏による BBQ とパエリア
Day2 吉野川市	まぜのおか午前 7 時出発→Hostel OE（吉野川市）→大畠酒造でお弁当ランチ→美郷ダウンヒル→眞鍋自転車店本店（山川町）→坂東商店（古民家リノベーション）→川田八幡神社→バンブーパーク吉野川沿いでコーヒータイム→善入寺島ライド　→Hostel OE →　夕食　吉野川市長と交流

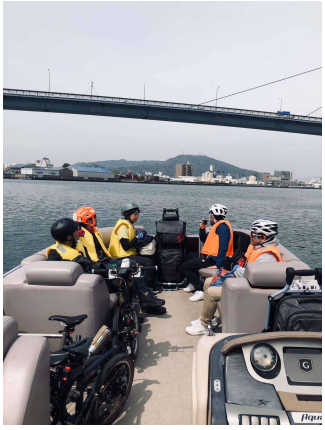

図-8　試走会での小松海岸でのミニキャンプ（左）とひょうたん島水上タクシーに小径自転車を折りたたんでの船輪行（中央・右）（徳島県徳島市）

4 月 6,7 日は Tyrell&birdy の試乗会を実施した。地元の Tyrell&birdy ユーザーと、実際にこれらの折り畳みミニベロの製作者が一緒にキャンプライドをする企画である。これまでのミニベロアドベンチャーツーリズムサミットで行ってきたキャンプライドの地元ユーザーへの共有の機会ともいえる。また、前述のように、折り畳みの小径車という特徴を活かし、地元の NPO が運営する「ひょうたん島水上タクシー」を利用した（図-8)。参加してくれた地元ユーザーへの徳島流の折り畳みミニベロライフスタイルの提案でもある。

Day1 は、メインフィールドは徳島市内から車で 3 時間以上かかる海陽町であるため、朝の 5 時半に徳島市内のブルーサイクルラボに集合した。徳島市内から海陽町役場までは約 70 キロある。そこから、最初の訪問地である轟竜瀑院竜王寺までは約 30 キロある。朝 6 時に出発し、轟竜瀑院竜王寺に到着したのは 9 時半であった。参加者の折り畳み自転車を持参し、前述のようにメンバーである轟竜瀑院竜王寺の住職による自転車ご祈祷を行った（図-9)。住職はこの日のために、自転車の下にひく敷物を特別に仕立ててくれていた。そのあと、轟の滝を見学。その後、小一時間かけて麓の漁港の名物の海鮮丼を食べた。今回も小雨であったが、奇跡的に瞬間晴れたので、Pacific Cycles の公式広報 YouTube 撮影の候補地であった大里松原海岸のサイクリングを実施した。そのままオートキャンプ場まぜのおか（宿泊場所）までサイクリングを実施し、いったん休憩。Tyrell 代表の廣瀬氏は夕食の BBQ の準備を開始。住職の友人の漁師さんが、昨日採ってきてくれたあめごの串焼きなどの準備にかかる。一旦、雨が止んだので、住職とブルーサイクルラボの眞鍋代表のアテンドのもと Pacific Cycles の撮影チームは釣りに向かう。1 時間ぐらいで雨が再び激しくなってきたので釣りチームが戻ってくる。フグとカサゴが釣れた。地元の四国の右下 DMO が特別に伊勢海老お造りワークショップ＆伊勢海老の味噌汁をふるまってくれた。残った伊勢海老は Tyrell 代表の廣瀬氏がパエリアの材料として使用（図-10)。あっという間に 1 日が終わった。

図-9 轟竜瀑院竜王寺への苔むす参道と自転車ご祈祷（左、中央）と松原の中のライド（右）（徳島県海陽町）

図-10 伊勢海老お造りワークショップ（右)、あめごの串焼き（中央）とあめご串焼きと BBQ（右）

Day2　海陽町の「まぜのおか」を午前 7 時出発。徳島市内まで約 50 キロかけて戻り、そこから吉野川市へ。10 時半に Hostel OE（吉野川市鴨島町）に到着し荷物を下し、美郷の「大畠酒造（梅酒特区）」へ。12 時前に到着。今回はこの後にサイクリングがあるので、梅酒は持ち帰り夕食時に飲むこととする。ここでお弁当ランチ。その後、美郷のトンネル横の旧道の入り口付近まで移動。13 時より美郷旧道ダウンヒルを行い、眞鍋自転車店本店（山川町）に到着。ご近所の阿波和紙伝統産業会館を見学後、ここから宿泊地の Hostel OE まで 30 キロ弱のサイクリングを開始。最初は、近所で古民家をリノベーションし、藍染めの工房と宿泊施設を始めた坂東商店を訪問。次いで、近くの川田八幡神社を参拝。バンブーパークを経由し、吉野川沿いでコーヒータイム。潜水橋を渡り、日本最大の中洲である善入寺島ライド。春は菜の花が美しい（図-11）。16 時半に Hostel OE に到着。夕食は吉野川市長と交流し、今後のサイクルツーリズムの意見交換を行い、第 3 回ミニベロアドベンチャーツーリズムサミットは終了した。

図-11　大畠酒造でのお弁当ランチ（左）、吉野川沿いのコーヒータイム（中央）と善入寺島ライド（右）

4. まとめと考察

(1) 成果：本ツアーを通じて生み出されたもの

3 回のミニベロアドベンチャーツーリズムサミット開催により形成された組織間のネットワーク構造と今後のツーリズムの展開について表したのが図-12 である。3 回のサミットを通じて、複数回参加しツアーの中心的なメンバーとなった団体に網をかけている。第 3 回ミニベロアドベンチャーツーリズムサミット後に、この中心的ネットワークを介在して生み出されたものとして、上方の海外の自転車産業ネットワークからは、①「四国遍路特化型グラベル Bike 製造」、②台湾インバウンド観光客受け入れ（2024 年夏予定）、③ディーラーズミーティング受け入れ（2024 年秋予定）があり、下側の国内地方創生関連ムーブメントからは、、吉野川市の市政 30 周年記念事業として④「高越山ヒルクライムレース大会（2025 年 10 月開催予定）」がある。

本稿のまとめとして、本ツアーが、マスツーリズムによる観光事業とは異なり、ビジネスコミュニティの創造（ソーシャルキャピタル）を生み出す過程を示したい。

2024 年 3 月 7 日-9 日に、ミニベロアドベンチャーツーリズムサミット主催者の眞鍋氏と著者は台湾で開催された Taipei Cycle に参加している。これはアジア最大規模の自転車製品展示会であり、主に自転車販売店、代理店向けの展示会である。台湾、中国、ヨーロッパからも自転車製造メーカーが出展している。Tyrell のフレームは台湾の自転車製造メーカーが製作しており、Tyrell 代表の廣瀬氏は創業以来 Typei Cycle には参加し、近年は台湾のフレームを製造しているメーカのブースに Tyrell ブースを出展している。Pacific Cycles は言わずと知れた台湾の老舗自転車メーカーであり大きなブースを毎年出展している。また、自転車専門雑誌の Bicycle Club も Taipei Cycle に出店していた。図-12 の黒塗りのネットワークが期せずして台湾で出会うことになった。加えて、台湾自転車製造工場ネットワークを Tyrell 代表の廣瀬氏、Pacific Cycles の大川氏より紹介を受けることができ、このネットワークを通じて、プロトタイプではあるが、ミニベロア

ドベンチャーツーリズムサミットの目玉にもなる、四国遍路専用グラベルロード Bike をブルーサイクルラボの眞鍋氏プロデュースで作ろうという話になった。第 3 回目のミニベロアドベンチャーツーリズムサミット中にも、今後の自転車構想などが話し合われていた。

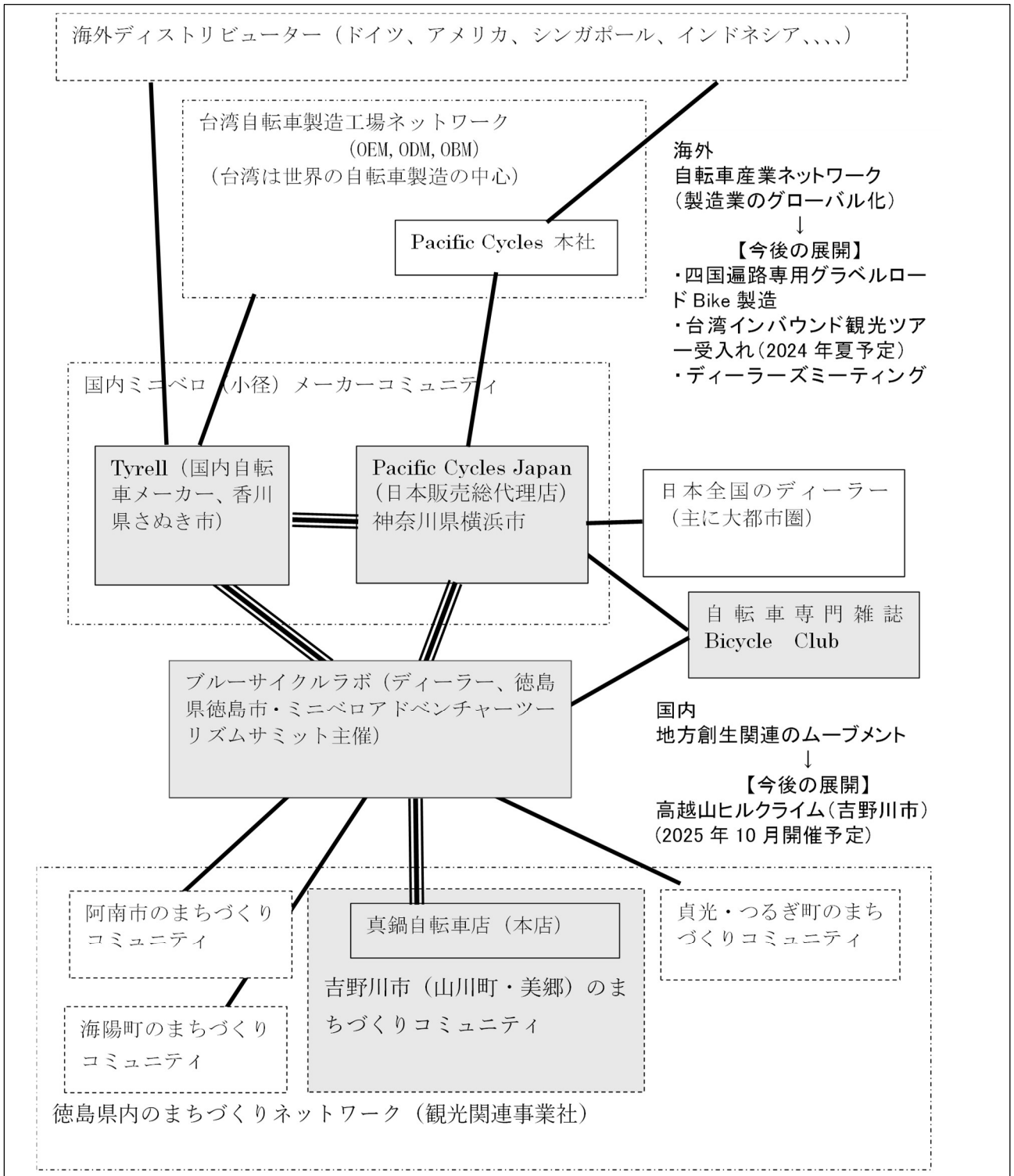

図-12　3 回のミニベロアドベンチャーツーリズムサミット開催により生み出された組織間のネットワーク構造と今後のツーリズムの展開

加えて、この Taipei Cycle において、Tyrell が ODM でフレームを作っている台湾の自転車メーカーとも親交を深めたので、今後のインバウント観光ツアーの第一弾として彼らを日本に招聘することを考えている。フレームを製造する台湾メンバーに、我々の徳島、四国のフィールドを知ってもらうことにより、よりよい自転車ができることにつながると考えての企画である。

また、3 回のミニベロアドベンチャーツーリズムサミットを通じて、全て参加している Pacific Cycles 大川氏より、2024 年の 10 月ぐらいにディーラーズミーティングを実施してみたいとの依頼があった。そして、Pacific Cycles Japan の公式ホームページにおいても第 3 回ミニベロアドベンチャーツーリズムサミットの様子は複数回に分かれてリリースされている注７)。

さらに、徳島の国内地方創生関連ムーブメントからは、これまで吉野川市の山川町・美郷を中心としたサイクリングコースのコンテンツ造成などを通じて行政と連携していたこともあり、吉野川市の市制 30 周年記念事業の一つとして、山川町の観光資源でもある「高越山ヒルクライムレース」開催を決定した。第 1 回準備委員会が 2024 年 5 月 14 日に開催され、私も準備委員を務め、2025 年 10 月開催を目指している。

(2) 考察:総務省の関係人口論からみた、ミニベロアドベンチャーツーリズムサミットの評価

総務省では現在、定住人口が減少する地方社会に対して、単なる観光客（交流人口）でなく、「関係人口」と呼ばれる地域外の人材が、地域づくりの担い手となることを期待し、政策化している。下図は総務省の関係人口ポータルサイトにより関係人口をイメージ化したものであり、その説明を、以下のように記している。

関係人口とは？

「関係人口」とは、移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域と多様に関わる人々を指す言葉です。

地方圏は、人口減少・高齢化により、地域づくりの担い手不足という課題に直面していますが、変化を生み出す人材が地域に入り始めている例も多くあり、「関係人口」と呼ばれる地域外の人材が、地域づくりの担い手となることが期待されています。

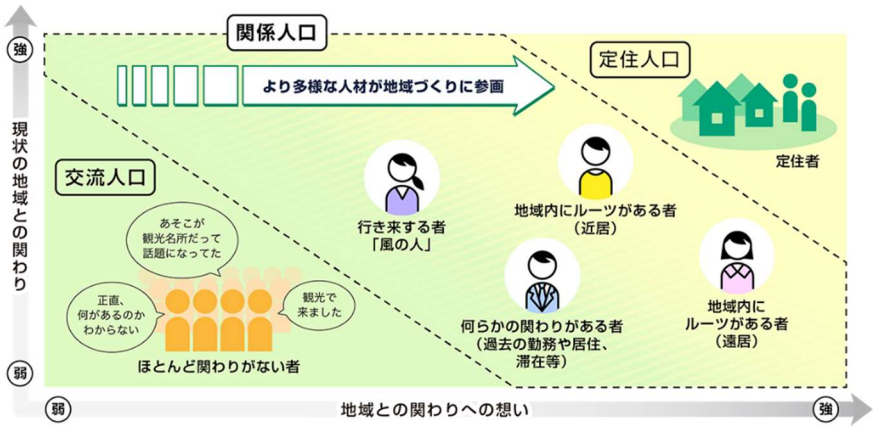

図-13　総務省関係人口ポータルサイトによる関係人口の説明を示す図

出展）https://www.soumu.go.jp/kankeijinkou/about/index.html

ミニベロアドベンチャーツーリズムサミットを事例に考えてみよう。この総務省のスキームに従うのであれば、ミニベロアドベンチャーツーリズムの参加者である自転車関係者は、単なる物見遊山的な「交流人

口」ではないことは、これまでの分析から示されていよう。参加メンバーが最も関心のある自転車を共通言語として、参加者のビジネスにプラスになるようなツアーに参加しており、ここでいうところの「関係人口」づくりであるとも言えよう。マスツーリズム的な観光客は「交流人口」に過ぎず、地域活性化を念頭におくなら、交流人口という入込数の増大を目指すよりも、何かしらの地域づくりの担い手となる可能性を狙っての交流人口づくりを目指す方が戦略的であると言えよう。

それでは総務省の関係人口ポータルサイトでは、どのように関係人口を定義づけているのだろうか。図-13からは、「現状の地域との関り（縦軸）」だけではなく、「地域へのかかわりへの想い（横軸）」を示し、それらが高い人を「交流人口」ではなく、「関係人口」と定義し、「行き来する者「風の人」「地域内にルーツがある者（近居）」「地域内にルーツがある者（遠居）」「何らかの関りがある者（過去の勤務や居住、滞在など）」と分類しているように読み取れる。そして、この図での位置づけから判断するならば、「何らかの関りがある者（過去の勤務や居住、滞在など）」、「地域内にルーツがある者（近居）」「地域内にルーツがある者（遠居）」は、ある種の定住人口よりも「地域との関りへの想い」が強い人と定義し、そのような人の創出を政策化しようとしているようである。

このような定義づけと方向付けは、情緒的には著者も同意するところはあるが、ミニベロアドベンチャーツーリズムサミットでの参加者をこの関係人口の枠組みで定義づけようとすると、一番近いのは「行き来する者「風の人」」となり、関係人口ポータルの中では最も「現状の地域との関り」が低く「地域との関りの想い」が低い位置づけとなり、暗に、他の 3 者に比べると地域づくりには役立たないということが含意されてしまう。

若干、重箱の隅をついている感もあるが、政策として考えた場合は、当該地域に対する「想い」による測定のみではなく、関係人口が所属している中心的な組織やコミュニティを踏まえたうえでの、当該地域への「関係」を議論する必要があるのではないだろうか。本研究で示したような（ビジネス or コミュニティ）ネットワークのつながりとして、結びつきを強くしてゆく相互行の集積と連鎖＝ソーシャルキャピタルとして議論してゆく必要があるのではないだろうか。本事例でいれば、「ミニベロアドベンチャーツーリズムサミット」が定住人口（国内地方創生のムーブメント）と関係人口（海外自転車産業ネットワーク）をつなぐハブとなっている。一旦、サイクルツーリズムからはなれ、一般のツーリズムとして考えるならば、現在、当該地域とビジネス上の関係をもっている地域外のメンバーに特化したツアーを行うことは自転車産業以外でも可能であると思われる。

加えて、関係性の変化にも注目してゆくことが重要であろう。それぞれのメンバーが所属している組織にとっての本ツアーへの参加する意義を深める形で、3 回のツアーのテーマが変化してゆくことで、内発的にミニベロアドベンチャーツーリズムサミットを継続させるダイナミズムが生まれている。その結果が、現状では、「①「四国遍路特化型 Bike 製造」、「②台湾インバウンド観光客受け入れ（2024 年夏予定）」、「③ディーラーズミーティング受け入れ（2024 年秋予定）」、「④「高越山ヒルクライムレース大会（2025 年 10 月開催予定）と、「③ディーラーズミーティング受け入れ（2024 年秋予定）」以外は、全く予想していなかったことである。そしてこれらの事業を実行することで、コアの自転車関係者のビジネスコミュニティとしての関係も深くなり、加えて、これらの事業がハブとなり、次なる未知の新たな関係人口を生み出す可能性を有していよう。主催者側の我々はこの点を踏まえて今後のツアー展開を考えてゆこうと考えている。

また、もう少しマクロな視点で、関係人口の視点からミニベロアドベンチャーツーリズムの意義を再考することもできよう。ミニベロアドベンチャーツーリズムにおいてはホスト側の我々であるが、3 回のツアー

の間に、Pacific Cycles Japan の横浜本社に飛行機輪行（折り畳み自転車を飛行機で持ってゆく）を実施したり、Tyrell のファクトリーフェスでの試乗会のガイドを行ったりとお互いの拠点を訪問しあっている。このように徳島の「定住人口」である我々自身も、「交流人口」のメンバーの定住地にゆくことで、再帰的に我々が、そこでの「交流人口」となる。このような相互訪問を経て、関係性が相互に強固になっていった結果としてミニベロアドベンチャーツーリズムが継続され、様々な事業が産み出されているとも考えられる。図-13 の関係人口ポータルサイトの図からは、地方の定住人口は常に定住人口であり、交流人口は都会からやってくるものというイメージが見られるが、そのような一方的な関係ではなく、自分たちも交流人口として他地域と関わるような相互扶助的な関係性こそが強い関係人口を作ってゆくのではないかと著者は考える。今回は、徳島側からの分析視点であったが、今後はこのような双方向的な視点から分析を行ってゆきたいと考えている。

注１）　認定基準などは、以下の「国土交通省　ナショナルサイクルルート」HP 参照
https://www.mlit.go.jp/road/bicycleuse/good-cycle-japan/national_cycle_route/index.html

注２）　この様な問題点にたち、「自転車利用環境会議では」、徳島大学サイクルツーリズム講座を主催している山中英夫（徳島大学）がコーディネーターとなり、2022 年 11 月 5 日開催の「第 9 回自転車利用環境向上会議 in さいたま市」第 3 分科会「サイクルツーリズム　～成果を生む要は？～」、2024 年 11 月 4 日開催の「第 10 回自転車利用環境会議 in 仙台」第 5 分科会「サイクルツーリズム」というサイクルツーリズムをテーマとする分科会を開催し、高橋氏と私もパネラーと参加して議論を深めている。2025 年の福井県での大会でも連続して議論してゆく予定である。

注３）　会社名は「アイヴエモーション」であり、「Tyrell（タイレル)」はブランド名であるが、分かりやすさから本項では会社名ではなく、ブランド名の Tyrell を用いる。会社の詳細は以下の web を参照。
https://www.tyrellbike.com/company/

注４）　「一夜限りの阿波踊り」実行委員長の和泉氏は、もともと万代町でのプルーサイクルラボの出店を進めた地元の先輩である。加えて、本ツアーでの定番の宿である Hostel OE のビルは、和泉氏が購入し萬川氏に管理を任せている。また、Hostel OE が面している鴨島駅前商店街を阿波踊りは練り歩き、屋上からは阿波踊り全体が見られるという絶好の立地にある。

注５）　参加時点では掲載が確定していたわけではなく、あくまで候補の一つとして参加であった。結果的には掲載となったが、今回も天候不良（台風）で当初予定していたコースでの釣りはできず、当初のツアー日程以降にも釣りを行うこととなった。

注６）　著者の矢部は徳島大学に赴任以来、「新町川を守る会」のメンバーである。代表の中村氏はたとえ雨が降っていてもお客さんが乗りたければ我々は濡れても船を出すとのポリシーを持っている。徳島市民であれば晴れたらまたくればいいが、観光客の場合は、一合一会、今回乗れなかったら二度と乗る機会がないかもしれない。また、雨の中の乗船体験もよい記憶になり、気に入ってくれればまた徳島に遊びに来てくれるかもしれない。「川を中心としたまちづくり」を進める中村代表の気概である。今回も、メンバーが乗船に意欲的であったので、結局、雨に降られてしまったが、出船してもらった。ちなみに私は濡れるのが嫌なので、乗船せず、屋根のある船着き場で NPO メンバーと今回のツアーの説明をしていた。

注７）　「パシフィックサイクルズジャパンチャンネル（https://www.youtube.com/@PacificCyclesJapan)」においては現在 Day1 と Day2 の２つのコンテンツが公開されている。Day１は三週間前に公開され 889 回視聴、Day２は 10 日前に公開され 4322 回視聴（2025 年 5 月 26 日時点）

【参考文献】

1) 小熊編著（2019 年）『平成史（完全版）』河出書房新社
2) 矢部拓也、野続祐貴（2016 年）「北海道におけるインバウンドを活かした健全な地域形成とはなにか？ ： 外国人富裕層向けツアーコンシェルジュのライフヒストリー ： 夏の北海道ニセコ地区、空知地区・美唄市でのサイクルツーリズム立ち上げを事例として」徳島大学社会科学研究 vol.30,pp.175-199
3) 高橋幸博、山中英生、矢部拓也、久田慎太朗、松下祐貴（2022 年）「徳島サイクルツーリズム講座の取り組み」第 9 回自転車利用環境向上会議 in 埼玉、ポスターセッション報告
4) 矢部拓也(2023 年)、「地方都市にみられる旧来型のコミュニティを維持しつつ,社会課題の解決を図っていくあり方への一考察 ： コロナ禍において活動を拡大させた徳島県吉野川市一般社団法人 Kittamu を事例として」都市計画 vol.72 No.5,p.p.38-41
5) 眞鍋祐樹、原田真、萬川奨、矢部拓也（2022 年）、「ガイド付きサイクリングツアーアクティビティ調査報告 : 徳島県吉野川市、阿南市、徳島市でのフィールドワークを事例として」第 9 回自転車利用環境向上会議 in 埼玉、ポスターセッション報告
6) 眞鍋祐樹、萬川奨、矢部拓也（2023 年）、「フルアテンドツアーに向けた、折り畳み自転車を利用したミニベロアドベンチャーツーリズムの試み」第 10 回自転車利用環境向上会議 in 仙台、ポスターセッション報告

【インフォームドコンセントに関して】

本稿で掲載している写真は、著者らが主催する撮影を伴ったサイクリングツアーの写真であり、ツアーの参加条件として写真の公開を前提としているものである。

【謝辞】

ミニベロアドベンチャーツーリズムサミットに関わってくれているすべてのメンバーに感謝します。今後とも単なるマスツーリズムに陥らない地域活性化に寄与するサイクルツーリズムを作り上げてゆきたいと考えています。また、本研究は、基盤研究費(B)22H03853 双方向ラーニング・ワーケーションによる地域活性化の実証的研究（研究代表者 : 原直行）の成果の一部である。合わせて感謝したい。

Toward the Implementation of Cycle Tourism in Regions with Backward Bicycle Tourism Policies：A Trial of the Tokushima Mini-Velo Adventure Tourism Summit

YABE Takuya, MANABE Yuki, MANKAWA Sho

This study is a practical report of three Mini-Velo Adventure Tourism Summits conducted since 2023. This tour is unique in that it is not mass tourism, but a small number of fully-attended tours limited to those involved in the bicycle industry, which is the livelihood of one of the authors. The bicycle industry is a global network with Taiwan as the center of production, and the combination with this network led to future inbound tourism plans from Taiwan and the manufacture of original bicycles specialized for the Shikoku pilgrimage. The combination of the existing bicycle industry business community with the traditional local host network as a sightseeing tour has resulted in a populated relationship that has spawned a variety of innovative tours that were not initially anticipated.